

いてしまひました。

「旅のお方、僕は馬の耳の穴の中に居る、小さな小僧です。此處です、此處です。」旅のお方が馬の耳の穴を見ると、小さな／＼ちび助が居るので、又々びつくりしました。

「もし旅のお方、僕をあなたの掌上の上へ載せて下さい。」

旅のお方が、ちび助を掌へ載せると、ちび助は「僕のうちへ、此の馬を連れた泥棒が這入つて豆俵を盗み出したんです。其の豆俵に僕がつかまつて居て、途中で、泥棒が此の馬をほうつて逃げて行つてしまひました。」

と話しました。旅のお方は。

「あゝさうですか、此の馬は福といふ名で私の家の大切な馬でしたが、或晩泥棒に盗み出されてしまひました。」

と言ふと、旅のお方は誰がものと言つたのかと言

ひます。ちび助は、

「それでは此の馬はあなたののですか、それならあなたにお返し申しませう。」

と言ひました。旅のお方は、

「いや／＼、此の馬はもうあなたの物です。あなたの心掛に感心しましたから、あなたに上げませう。」

と言ひましたので、ちび助は大喜びに喜びました。

たらり柿

柿の木が一番高い所に、たつた一つ眞赤な柿の實が残つて居ました。鈴なりになつて居た柿の實は、皆食べられてしまつて、最後に残つたたつた一つの柿の實は、柿の木が一番高い所に、うまさうな色をして赤々と光つて居ました。葉っぱも一枚残らず風に吹き落されてしまつて、柿の木は枝ばかり、たつた一つきり残つてゐる其の柿の實は

此の柿の木の寶物のやうに見えました。

トク坊は柿の木へ登つて、其の柿を取らうとしました。が、あまり高い所にあつて、どうしても其處までは手が届きません。長い竿を持ち出してはたいて見ましたが、とてもはたき落す事は出来ません。石を投げ附けて見ましたが、落ちては来ませんでした。さてどうしたものかと、トク坊は毎日柿の木の下へ来ては、うまさうな其の柿の實を見上げて居りました。

トク坊の居ない時には、鳥が来たり、百舌が来たりして、ちよいくとつゝきました。或日一羽の鳥が柿の木にとまつて。

「一つ御馳走にならうか、カア〜。」

と言つて、つゝき出しました。之を見付けたトク坊は、そら大變と駆け出して来て、

「ほい、ほい。泥棒鳥、ほい、ほい。」

と鳥を追拂つてしまひました。

今度は百舌が来て、やかましい聲で、

「いよう柿君、御馳走になるよ。」

と言つて、つゝきました。トク坊は食べられては一大事と、

「百舌のおしやべり、ほい、ほい。」
と追拂つてしまひました。

柿はますます赤く熟して、西の山へ這入るお天たう様の色よりも濃くなりました。トク坊は、
「どうしたら、あの柿が取れるかなあ。」

と頭を振つて考へましたが、いゝ考が出て来ません。も一度柿の木に登つて、手を伸して見ましたが、手の先よ、づうと〜高い所に、柿の實はうまさうな色を見せて、ちつとして居りました。

「ちえつ、おた福柿！」

腹を立て、トク坊は、柿の木から降りて来ました。今度は、何時もの竿を持ち出して来て、あき樽の上に立つて、一生懸命はたき落さうとしまし

たが、柿はいや／＼とかぶりを振つたばかりで、
 どうしてもはたき落す事が出来ません。トク坊は、
 石を拾つて、

「この腐り柿め。」

とどなつて、はつしと投げ付けました。ぽかつと
 石があたつたとたん、眞赤な柿の實は、たらりと
 トク坊のあほ向になつた額の上へ、とどろのやう
 になつて垂れました。

森の中の古靴 A B C

夕焼のきれいな或夕方の事でした。鳥も獣もみ
 んな仲よく手をつないで散歩に出かけますと大き
 な樫の木の下に誰か旅人の棄てた古い靴がござい
 ました。みんなこんな變てこなものを見た事がな
 いので小鳥達は化物ぢやないかしらとブル／＼慄
 え出しました。すると年老の熊さんが黒い眼玉で
 チツと靴をみながら

「小鳥さん、そんなに恐がる事はいりません。こ
 の年老のいふ事を聞きなさい。これは堅い／＼
 果物の殻です。みなさんの柔い羽でさすつてご
 らん！」

といひましたので小鳥達はすつかり安心しました
 「さあ、皆さん、まだ／＼恐ろしいものが出て來
 るかも知れないからさつさと歸りませう」

と熊さんが先頭に歩き出さうとしますと

「ヤ、こら、待て！」

と狼が牙をむき出して呼び止めました。

「これが果物の殻だつて？ 小鳥さん、熊君のい
 ふ事は嘘ですよ。私のいふ事を聞きなさい。こ
 れは大きな鳥の巢です、この澤山の小さな穴は
 小鳥の出入口でこつちの深い所は親鳥の卵を生
 む所なんです」

小鳥達は成程さうかも知れないと思つたので

「熊さんの嘘つき！ 鳥の巢ですよ。チュ、チュ